

アロイス・リーグル『末期ローマの美術工芸』 初版本とその邦訳について

文芸学部長 井 面 信 行

本学中央図書館には、近代芸術学の成立過程において極めて重要な位置を占める一冊の書物の初版本が所蔵されています。すなわち、Alois Riegl, Die Spätromische Kunstindustrie nach den Funden in Österreich-Ungarn in Zusammenhange mit der Gesamtentwicklung der bildenden Künste bei den Mittelmeervölkern, Wien, Druck und Verlag der kaiserlich-königlichen Hof- und Staatsdruckerei. 1901. (アロイス・リーグル『末期ローマの美術工芸—地中海諸民族の造形芸術の全体的発展との関連におけるオーストリア-ハンガリー帝国内の出土品に基づいて』、ウィーン、オーストリア-ハンガリー帝室-国家印刷部出版局、1901年)です。

アロイス・リーグル Alois Riegl, 1858-1905 は、近代芸術学・美術史学の礎を築いたウィーン学派の始祖とみなされています。彼の新しい方法論が近代芸術学ないし美術史学に占める位置は、この学問の確立にとって極めて重要な意味と価値を担っているといえるでしょう。そのリーグルの著と目されているのが、この『末期ローマの美術工芸』であり、その初版本が中央図書館に蔵されているのです。

Webcatを検索すると、この初版本を所蔵している大学は、近畿大学を含め全国に4大学しかありません。この書は、稀覯本とまでは言えないとしても、価値の高い貴重な図書と見なしてよいものと思われます。

私は、この歴史的名著の邦訳の機会に恵まれ、平成19年8月、中央公論美術出版よりアロイス・リーグル『末期ローマの美術工芸』として刊行しました(ただし、私が邦訳の底本としたのは1972年発行の第4版です)。今回「香散見草」の紙面をお借りしてこの歴史

的名著を紹介し、併せてこの書の翻訳事情を若干の忸怩たる思いと共にお伝えしたいと思います。

* * *

まず、この書物の装丁について述べることにしましょう。一見して立派な装丁のこの書は、縦420mm、横330mmの大型本であり、重さは5kgほどあります。したがって、とても手にとって読書ができるような判型ではありません。この書は1927年に再版されたのですが、そのときの編者は、再版の要求が高まっていることに触れて「そこには、判型を手の中に収まるものに改め、装丁を簡素にして、より広範囲の芸術愛好者や研究者が入手できるものにして欲しいという願いも含まれていた」と述べています。再版の判型は、縦が230mmのいわゆる菊判に近いものとなっています。

表紙はモスグリーンで、タイトルが金文字で書かれています。タイトルの上部には、本書で言及されている、柘榴石を嵌め込んだ装飾品(ウィーン美術史美術館蔵)が、凹凸のある立体的な表現でデザインされて貼り付けられています(写真1-1,2)。

本書の装丁がこのように立派なものとなった理由は、この書物がリーグルの個人的出版物ではなく、オーストリア文化教育省の助成を受けて、国立オーストリア考古学研究所が発行したものである点に求められると思います。そもそもリーグルの『末期ローマの美術工芸』は、古代の美術工芸の全貌を明らかにする全集の一巻を為すものでした。この全集はウィーンのオーストリア美術工芸博物館の学芸員であったカール・マスナー(Karl

Masner, 1858-1936) によって、1893年に企画され、先に述べたようにオーストリア文化教育省の助成を得て刊行が始まりました。その第一巻が1901年に刊行されたリーゲルの『末期ローマの美術工芸』だったわけです。企画してから第一巻の刊行まで8年かかっていることとなります。

リーゲルは、『末期ローマの美術工芸』において、コンスタンティヌス以降の時代といわゆる民族移動期の美術工芸品を論じることを引き受けました。リーゲルの計画では、この著作は第一部であり、引き続き第二部を執筆する予定でした。しかし、彼の早すぎる死(1905年、享年47歳)がこの仕事の完成を阻んでしまいました。

カール・マスナーが企図した全集の刊行は、リーゲルが亡くなった時点で『末期ローマの美術工芸』一冊だけという状況であり、企画の進行は完全に停滞していました。その理由は、リーゲルの死に加えて、マスナーがウィーンを去り、プレスラウの工芸美術館館長として赴任してしまったことにあるようです。

『末期ローマの美術工芸』の出版の経緯についての話が少し長くなりました。

この初版本のもっとも魅力的な点についてお伝えしなければなりません。それは、巻末に収められた23葉の図版の中に含まれた11葉の色刷図版です。これらの図版は精緻なエッチングによるものであり、留め金、ブローチ、バックル等、そのほとんどが原寸大で描かれています。例えば、〈写真2-1〉は柘榴石嵌入細工による衣服の留め金—この留め金は長さが15cm以上もある立派なものです—を描いたエッチングです。左側に突き出た部分にはライオンの頭部が表されています。金の台に赤色の柘榴石が嵌め込まれたこの豪華な留め金の鮮やかな色彩対比が、見事に描き出されています。〈写真2-2〉は、ベルトのバックルです。これもまた金の台に柘榴石が嵌め込まれており、さらに打出し細工によって四足獣の姿が浮彫にされています。このエッチングもバックルの繊細な細工の様子を生き生きと伝えて

おり、読者の目を惹きつけて離さない魅力を持っているといえるでしょう。

ところが、初版本に収められていた色刷図版は、1927年の第2版では2葉に制限され、さらに私が邦訳の底本とした1972年の第4版ではまったくなくなっています。リーゲルのこの著作を理解するうえで、色彩と明暗の問題は重要な意味を持っているため、第4版以降に色刷図版がなくなってしまったことは大変残念なことでありました。そこで、私の邦訳書では、出版社にお願いして初版の11葉の色刷図版を写真複製で掲載することにしました。それが可能となったのも、本学中央図書館に初版本が所蔵されていたおかげです。

* * *

リーゲルの業績を、彼の経歴と併せて簡単に説明をしておきたいと思います。

リーゲルの芸術学研究の基礎は、オーストリア美術工芸博物館に学芸員として勤務した経歴にあります。『末期ローマの美術工芸』の、とりわけ「美術工芸」の章に展開される極めて精緻な「平面と空間における形と色彩」の分析は、この学芸員時代に精力を注いだ収蔵品の精細な研究、調査から生まれた鋭敏な観察眼に基づいていることに疑いの余地はありません。

1897年、リーゲルはウィーン大学美術史学講座正教授に就任しました。しかし、博物館から離れ、生気に満ちた作品群と直接に接する機会を断たれることはリーゲルにとって辛いことだったようです。当時、ドヴォルザークという弟子に「私は天職をなくしたよ (Ich habe keinen Beruf.)」と悲しげに語ったと伝えられています。

とはいえ、ウィーン大学時代の研究は、リーゲルの名声を確立した極めて価値の高い成果を生みました。すなわち、最初の大著『様式問題』(1893年)に続いて、彼の主著と見なされる『末期ローマの美術工芸』が1901年に上梓され、翌1902年、第三の大著となる『オランダ集団肖像画』が発表されたのでした(因

みに、この三冊ともに原著が中央図書館に所蔵されています。ただし、他の二冊は初版本ではありません）。

リーゲルはウィーン大学正教授の職と並行して、1902年から文化財保護中央委員会の委員長に就任し、文化財保護法の草案の起草などに尽力しました。しかし、1905年に、決して長くはない47歳の生涯を閉じました。

『末期ローマの美術工芸』の直接の目的のひとつは、末期ローマ時代—リーゲルは、この年代画期で、コンスタンティヌス大帝（306年即位）からカール大帝（800年、ローマで戴冠）までの時代を念頭に置いていました—の美術はギリシア古典美術からすれば頽廢にすぎないという偏見を打ち砕くことにありました。実際のところ、多くの人がそう感じるように、ギリシア美術が産み出したパルテノン神殿のレリーフや《ミロのヴィーナス》などと比較すれば、私たち近代人には末期ローマ美術は美しくもなく、生気もないように見えるのは確かです（参照、写真3、4）。

しかし、リーゲルは、近代において末期ローマ美術が評価されない理由は、作品を「美しいか美しくないか」という主観的な美的趣味によって批評しようとするからにすぎないと考えます。リーゲルにとって重要なことは、近代人が美とか生気とよぶものによって造形芸術の目的が完全に汲み尽されるのではないということ、むしろ、人間の造形活動は、歴史的形成過程の中では、近代人の美的判断からすれば美しくもなく、生き生きもしていない別の芸術形式を産み出すことにも向けられるという美術史観を獲得することなのです。

そして、それぞれの時代がもつ造形への独自の自律的意志のことを、リーゲルは「芸術意志 Kunstwollen」と名付けました。「芸術意志」は、芸術外的な要素—宗教、政治、経済、技術、素材、目的等—に左右されることのない、芸術活動自体に内在する原理です。リーゲルは、古代エジプトから末期ローマに至るヨーロッパ美術の壮大な流れを「芸術意志」

の変遷の歴史として読み替えようとしたのです。そのための方法は、芸術の歴史的過程について一切の美的趣味や偏見を排除し、囚われない眼で「平面あるいは空間における形と色彩としての事物の現象」、「平面と空間に対する事物の関係」を観察、分析するという内在的方法でした。芸術を美的価値から切り離して一種の認識活動として理解し、それぞれの時代が芸術活動を通して世界をどのように捉えようとしたのか—そのことを見極める点にリーゲルの方法の革新があったと言えるでしょう。

* * *

最後に、僭越ではありますが、私の翻訳事情について少しだけ述べさせていただくことにします。

芸術学の世界における記念碑的ともいえるこの名著の翻訳に臨んで、私には不安とためらいがありました。この翻訳は、当該の研究領域に長く、深く取り組んできた研究者にのみ許される仕事であると考えからです。

しかし、この翻訳を引き受けるについては一つの伏線がありました。リーゲルの翻訳に先立つこと4年前の平成15年に、私は同じ中央公論美術出版からアウグスト・シュマルゾー『芸術学の基礎概念』（1905年）を刊行しました。シュマルゾー（August Schmarsow, 1853-1936）という研究者も、リーゲルなどと並んで近代芸術学の基礎付けに大きな功績を果たした人でしたが、それまで彼の邦訳は全くありませんでした。私の研究歴としてはシュマルゾー研究の方がリーゲル研究よりもあとなのですが、恩師に出版社との間を仲介していただき、シュマルゾーの翻訳の仕事を少しずつ始めました。しかし、翻訳は難渋を極め、完成までに足掛け10年を要しました（実際のところは、足掛け10年、実動5年というところでしょうか）。

シュマルゾーの翻訳が完成したとき、恩師から立て続けにリーゲルの訳を勧められました。そこで、私の心はこの節の冒頭に述べた

不安とためらいに揺れることになるのですが、シュマルゾーの『芸術学の基礎概念』という書物が一貫してリーゲルの『末期ローマの美術工芸』との対決というかたちで展開されていることを考え併せたとき、リーゲルを芸術哲学の観点から読むことの重要性を改めて認識するようになりました。そこで、美術史的知識に関しては多少ご容赦をいただき、リーゲルの芸術学の方法論、基礎概念を広く理解してもらうためにも、この翻訳に取り組もうと決心をしました。

話が脇道にそれますが、シュマルゾーとリーゲルの二つの翻訳に関してちょっとしたエピソードがあります。シュマルゾーの『芸術学の基礎概念』の邦訳が公刊されたとき、建築家の八東はじめさんが、あるネット上のコラムで私の邦訳を紹介してくださいました。その中でリーゲルの『末期ローマの美術工芸』のことに言及され、「この著書は未邦訳で中央公論美術出版さんには早く出してほしい」と記されたのです。すでにそのとき、私の『末期ローマの美術工芸』の翻訳はある程度進んでいました。邦訳が完成したとき、私は、八東さんとは全く面識はありませんでしたが、お書きになったコラムのことを述べて拙訳を献呈しました。いただいた返事には、私がコラムを書いたときはすでに翻訳は始まっていたでしょうから、私の言葉にさぞ驚かれたことでしょうか、という意味のことが綴られていました。まさしくその通りなのですが、そんなことよりも、私はシュマルゾーの『芸術学の基礎概念』が、美学・芸術学よりもむしろ建築学の研究者に反響が大きいことに驚きました。シュマルゾーは建築の本質を「空間形成作用」と定義付けた最初の人であり、それが近代建築学の根本思想の土台となっていることを考えれば、納得のいくことではあるのですが。その関連で、リーゲルの『末期ローマの美術工芸』の邦訳も建築学の方々に期待されていたようです。

ともあれ、リーゲルの翻訳が始まりました。大学院生時代に少しずつ訳し溜めていった訳

が手元にありました。けれども、公刊するとなるとまた一から訳し直さねばならないことは、すでに経験済みでした。外国書の翻訳には様々な困難が伴いますが、なんといっても一番悩むのは訳語の選択です。ひとつだけ例を挙げて、試行錯誤の軌跡を紹介します。

そもそもこの書のタイトルの訳が問題でした。原著は Die Spätromische Kunstindustrie です。私の観念の中には、ひとつの訳語が当たり前のものとして定着していました。すなわち『末期ローマの美術工芸』です。その理由は簡単で、私の学んだ大学の研究室では、この訳語が代々通用していたからです。しかし、原点に立ち戻って考えると二つの問題が出てきます。spät という語と Kunstindustrie という語の訳語です。

spät という形容詞を「末期の」と訳すか「後期の」と訳すか—それはリーゲルの美術史観と関わってきます。リーゲルは、spätromisch という言い方で、コンスタンティヌス大帝（306年即位）からカール大帝（800年、ローマで戴冠）までの時代を考えていました。この年代画期の意味は、北方からゲルマン民族がラテン世界に侵入し、西ローマ帝国を滅ぼし、終にはカール大帝がローマ皇帝として戴冠して古代社会が終焉したという西洋史の大きな流れの一般的理解に対応していることとなります。そして、リーゲルの時代には、ギリシア古典美術が頹廃したのは蛮族の文化がラテン世界に侵入したことの結果なのだ、と一般的に理解されていました。しかし、リーゲルは、芸術活動に関してこの500年の歴史過程を「衰退」とか「頹廃」とみなすのではなく、ゲルマン文化が新しい芸術形式のために創造的関与を果たした発展の時代として捉えました。したがって、私は、spät を価値変化の意味合いを含む語として理解し、単に物理的時間の前後関係を示すだけの「後期」ではなく、価値の盛衰の響きを感じとられる「末期」という語を当てはめることにしました。

Kunstindustrie に関しては、DUDEN の Das große Wörterbuch der deutschen Sprache に

も見出し語としてはありません。字面だけなら「技術産業」という訳も可能です。けれども、リーゲルのこの書の内容からして「工芸」か「美術工芸」かのどちらかの訳が妥当であることは間違いありません。ちなみに、西田幾多郎は、論文「歴史的形成作用としての芸術創作」でリーゲルに触れ、そこでは『後期ローマの美術工芸』と訳しています。一つ考慮すべきことがありました。ドイツ語には Kunstgewerbe という語があり、こちらの方がむしろ普通に「工芸」と訳される語だということです。DUDEN の辞書によれば、もともと「勤勉、精励」を意味するラテン語の industria は、ドイツ語においては 18 世紀半ばになって Gewerbe つまり「産業、工業」の意味を持つようになったようです。リーゲルが Gewerbe ではなくラテン語起源の Industrie を用いたことには理由があるにちがいませんが、浅学にして不明です。しかし、取り上げられている装飾品の数々は、単に工芸というより美術工芸と呼ぶにふさわしいものであるにちががなく、Kunst の語も重視して、最終的に「美術工芸」と訳すことになりました。

最終的に表題は『末期ローマの美術工芸』となりました。単純に『後期ローマの工芸』という訳も可能だったわけですが、結局は所属した研究室で言い伝えられてきた表記に落ち着くことになったわけです。そのとき、改めて先学たちの様々の思索に思いを馳せることにもなりました。

一般に学問世界では、翻訳の仕事は労多くして益少なし、と言われます。確かに時間はかかります。リーゲルの翻訳には 4 年ほどかかったのですが、しかし、私はもっと時間をかけるべきであったと反省しています。奇妙な言い方ですが、原稿をもっと「熟成」させるべきであったと思います。「熟成」の期間の長短は、直接には誤訳や誤植の多寡にも一正比例するとは限りませんが一つながると考えられます。すでに誤訳を指摘していただいた箇所もあります。「翻訳に誤訳はつきもの」、「誤

訳を恐れては、翻訳は出来ない」と言われますが、単に誤訳を減らす問題だけではなく、翻訳の仕事については、とりわけこのような歴史的名著の翻訳には、その書に寄り添って馴染むまでの時間、おそらく短くはない時間がどうしても必要なのだと思います。その点で、シュマルゾーの翻訳を 10 年間抱え込んでいたことは、自分の怠惰をちょっとだけ棚に上げれば、妥当だったという気がしています。

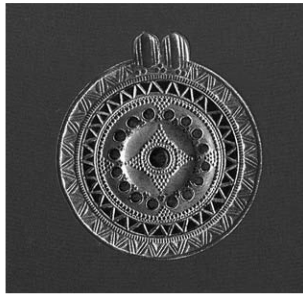
落ち着いた時間が得られたときに、私はこの翻訳をもう一度見直したいと思っています。そのとき本学中央図書館に、その初版本が所蔵されていることは、私にとって安心であり、ありがたいことだと感じています。

(了)

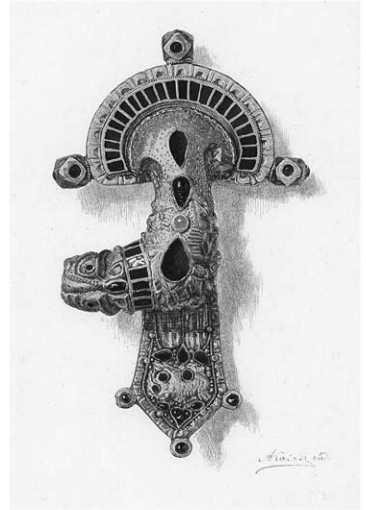
※本稿の一部に、拙訳のアロイス・リーゲル『末期ローマの美術工芸』「訳者あとがき」から一部を抜粋、改編して記載しました。



1-1 『末期ローマの美術工芸』
初版本 本学中央図書館蔵



1-2 表紙の図様



2-1 柘榴石嵌入金製留め金



2-2 柘榴石嵌入金製バックル



3. パルテノン神殿レリーフ 《乙女の行列》 ギリシア時代



4. コンスタンティヌス凱旋門レリーフ ローマ時代

【掲載資料紹介】

Alois Riegl, "Die spätrömische Kunst-Industrie nach den funden in Österreich-Ungarn : im zusammenhange mit der Gesamtentwicklung der Bildenden Künste bei den Mittelmeervölke"
Kaiserlich-königlichen Hof- und Staatsdruckerei ,1901

本館書庫大型コーナー 大型本 請求記号: 702.347 - R38 資料 ID: 10319246

アロイス・リーゲル著, 井面信行訳『末期ローマの美術工芸』中央公論美術出版, 2007

本館書庫 一般図書 請求記号: 702.03 - R38 資料 ID: 00484825

アウグスト・シュマルゾー著, 井面信行訳『芸術学の基礎概念』中央公論美術出版, 2003

3階開架 一般図書 請求番号: 701-Sc5 資料 ID: 00458927

